

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】

小原満春

【所属】（助成決定時）

和歌山大学国際観光学研究センター 客員フェロー

【研究題目】

ライフスタイル移住者の移住プロセスに関する研究－沖縄県における事例

【研究の目的】（400字程度）

日本の総人口が減少する中で、未だに都市への人口一極集中が進行し、それに伴う地方衰退を食い止めることは解決すべき喫緊の課題である。そのため地方自治体では移住定住政策を推進している。人口移動の研究では、古くから地方から都市への移動は研究されている一方、近年ではライフスタイル移住や田園回帰と言われる、都市から地方への研究も蓄積されつつある。しかし、この都市から地方への移住者が元の居住地へ「戻る」現象は注目されていない。現代において、移住者を誘致することは必要だが、各地方が永続的に誘致し続けるということは、人口獲得のゼロサム競争になり生産的ではない。よって、今後は移住者を誘致した後、つなぎとめる方策を考えていくことが重要である。そこで本研究では、都市から地方へ移住した人が、都市へ戻る「逆Uターン」いわゆる「帰還」に焦点を当て、動機である「なぜ元の居住地に戻ったか」という要因について明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】（800字程度）

本研究の調査は、文献調査およびインタビューによる定性調査、そしてアンケートによる定量調査である。

（1）文献調査

蘭（1994）は、人口還流は、能動的あるいは受動的な移動か、さらに都市によって引き起こされたプッシュ要因であるか、Uターン先地方のプル要因によって引き起こされるのかが、研究における重要な視点であると指摘している。そこで本研究においても、上記4つの視点で動機を分類した。

（2）インタビュー調査

調査会社のモニターに対して「沖縄へ理想のライフスタイルを求め移住をし、現在は沖縄を転出した方」というスクリーニングを行った。その結果、7名の対象者が抽出され、オンラインインタビューを行った。帰還理由について、プッシュ要因（沖縄）と能動的帰還の組み合わせ3名は「仕事の契約期間が切れたため、帰還のタイミングとして考えた」「地元の人との価値観が合わず帰還したいと考えた」「賃金が低くこのままでは帰還できなくなると考えた」と回答した。次にプル要因（帰還先）と受動的帰還の組み合わせ3名は「親が病気が（けが）をしてしまい、看病する必要があった」「結婚し子育てすることになり、親に帰還を迫られた」と回答した。最後にプッシュ要因と受動的帰還の組み合わせ1名は「身体を患い、適切な治療ができる病院がなかった」と回答した。帰還の阻害要因については全員なしと回答した。

（3）アンケート調査

次に、ウェブ調査会社に委託しアンケート調査を行った。スクリーニングを行ったところ40名抽出され、能動的帰還は22名、受動的帰還は18名となった。7段階のリッカートスケール方式で平均得点が高かった項目は、プッシュ動機で「賃金が低いから（3.5）」、プル動機で「親のことが気にかかるから（4.0）」、阻害要因は「これまでに沖縄で築いた人間関係を維持したかった（4.1）」、沖縄へのコミットメントは「私は沖縄が気に入っている（5.5）」、今後の沖縄との関係継続意向については「今後も頻繁に沖縄へ訪問したい（5.3）」となった。

【結論・考察】（400字程度）

ライフスタイル移住の帰還動機は、プッシュとプルおよび能動的と受動的の組み合わせに分かれた。賃金が

低いことによるプッシュ要因の帰還は能動的であるが、出身地の家族関係というプル要因における受動的な帰還は、社会構造的な帰還である。このことは、Walsh (2022) らの指摘や、これまでの U ターン研究における研究と同様である (蘭, 1994)。したがって、ライフスタイル移住においても、家族関係は最も影響力のある帰還動機として考えられる。また、阻害要因については、沖縄より平均賃金の高い地域への移住になるため「収入」に関する不安はなく、一方沖縄での人間関係を継続したい意思を持っていることから、これまでの U ターン研究とは異なる結果となった。以上のことから、ライフスタイル移住者の帰還動機はこれまでの U ターン研究とほぼ同様の結果となったものの、阻害要因がないことや、帰還後も関係継続意向がみられたことから、特徴の一端は明らかになった。

引用文献

Walsh, K. 2022. Returning lifestyle migrants. In King, R and Kuschminder, K (Eds.) , *Handbook of Return Migration*. (pp. 270-282) . Cheltenham, UK: Edward Elgar Publishing.

蘭信三 1994. 都市移住者の人口還流——帰村と人口 U ターン. 松本通晴・丸木恵祐編『都市移住の社会学』166-198. 世界思想社.